

聴覚障がい学生の情報保障の継続的实施に向けたテイカー育成 — 講習ビデオ作成の試み —

Training Student Supporters for Guaranteeing Information Accessibility for Hearing Impaired Students - Making Video Lecture for Training Supporters -

田中 愛莉^{*1}, 上原 亮太^{*2}, 皆川 雅章^{*2}

Airi TANAKA^{*1}, Ryota UEHARA^{*2}, Masaaki MINAGAWA^{*2}

^{*1} 札幌学院大学人文学部

^{*1}Department of Literature, Sapporo Gakuin University

^{*2} 札幌学院大学法学部

^{*2} Department of Law, Sapporo Gakuin University

Email: R150617@e.sgu.ac.jp

あらまし：聴覚障がいを持つ学生に、パソコンテイクと呼ばれる情報保障を行っている。情報保障を継続的に実施するため、本学では学生によるテイカー養成講習が行われている。講習では、テイク方法の解説等を行う講師役学生に加え、実際の場面を想定した実践的なタイピング練習のパートナー役を担う複数の補助学生の確保が課題となる。ここでは、講師の説明をビデオ化することによって、その問題を解消する試みについて報告する。

キーワード：聴覚障がい、情報保障、支援学生養成、ビデオ講習

1. はじめに

本学では、聴覚障がいを持つ学生を対象とした、パソコンを用いて講義中の教員と学生の発話内容を文字化して伝達する『パソコンテイク』と呼ばれる情報保障活動（以下、テイク活動）を行っている。このテイク活動を毎年継続して実施するため、支援を行う学生（以下、テイカー）を養成する必要がある。本学においては、テイカーの養成活動は学生の主体的取組みによって行われている。今回はその養成活動において講師の説明をビデオ化することにより運営の効率化を図る試みについて報告する。

2. テイク活動とその養成

パソコンテイクは、2 台のノートパソコンと文字の入力や表示を行うためのソフト『IPtalk』⁽¹⁾ を利用して行われる。この活動では連携入力という二人一組で交互に発話を入力する方法を使用し、講義内の教員と学生の発話内容をタイピングにより文字化してパソコン画面上に提示する。

テイカーは、活動を行う際に文字入力やソフトの使用方法についての技術が問われるため、それらの技術を習得する必要がある。現在は学生の主体的活動としてテイク活動を行うための講習会（以下、講習会）が開催されている。

3. 具体的な養成活動

3.1 講習会の流れ

講習会は前後期の各学期中と冬期を除く長期休暇中に行われる。これまで全 7 回のプログラムから構成されており、学期中は週 1 回で 7 週、長期休暇中

は 3 日間で 7 回分が行われていた（表 1 参照）。昨年、講習会の効率化のために講習内容の見直しを行い、プログラムを全 6 回に変更した。そのため今後は、学期中は週 1 回で 6 週、長期休暇中は 3 日間で 6 回分を行う予定である（表 2 参照）。

表 1 パソコンテイク講習会の説明内容（全 7 回）

第 1 回	聴覚障がいについて・テイク体験
第 2 回	入力時のコツ・変換・修正
第 3 回	IPtalk の機能・テイク時のルール
第 4 回	連携入力に挑戦
第 5 回	連携入力のポイント
第 6 回	iPad やスクリーンに映す方法
第 7 回	よりわかりやすくテイクをするには

表 2 パソコンテイク講習会の説明内容（全 6 回）

第 1 回	聴覚障がいについて・テイク体験
第 2 回	入力時のコツ
第 3 回	IPtalk で使える機能
第 4 回	連携入力に挑戦・テイク時のルール
第 5 回	連携入力のポイント・ e-typing（無料タイピングサイト）を使 ってみる
第 6 回	模擬講義

3.2 講習会における課題点とその解決

講習会実施にあたり、運営を担当するテイカー不足という問題が生じている。講習会では、進行や解説を行う講師役の学生に加え、二人一組で入力する際

のパートナー役やアドバイザーといった複数の補助学生が必要となる。しかし、テイカーが不足している状態ではそれらの役割を担うことができず、円滑な講習が行えないという問題が生じる。この課題を解決するため、講師の説明をビデオ化することによって講習会運営を効率化する。

3.3 ビデオ化の利点

講師の説明をビデオ化することには、これまで講師役を務めていた学生が補助学生としての役割を担うことが可能になるという利点がある。また、講習の内容を映像資料としてインターネット上にアップロードすることができ、これによって受講生が講習時間外に予習・復習を行うことが可能になる。

3.4 試験撮影

撮影方法検討に際して、予備実験的にビデオを作成し、それをもとにして撮影の台本を作成した。その過程で講師の過度の身振り・手振りは受講者の理解の妨げになることが判明し、それを留意点として試験撮影を行った(図1, 2)。



図1 試験撮影の様子①

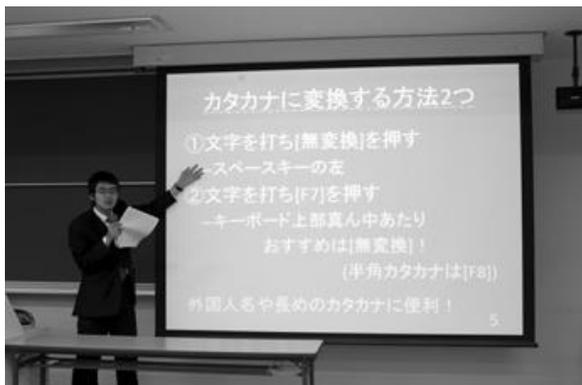


図2 試験撮影の様子②

3.5 試験撮影における問題点と改善策

試験撮影後、以下の問題点が指摘された。

- ①スライドの内容と口頭説明が一致していない部分がある
- ②1回分の内容の中で話題が大きく変わっている
- ③比喩表現や補足説明が多く簡潔さ・明確さが不十分である

分である

これらについて検討した改善策は表3の通りである。

表3 試験撮影における問題点と改善策

①スライドの内容と口頭での説明の不一致 → 撮影時に説明と同時にスライドを映す
②1回分の内容の中で話題が大きく変わっている → 説明を第1部と第2部に分ける
③簡潔さ・明確さが不十分である → 説明は必要なものに限定する → スライドの冒頭で流れを確認する → 一部の説明の順序を入れ替える

現在は前述の留意点に加え、試験撮影の結果から検討した5つの改善点を踏まえて台本の改訂を行い、第1回分の映像の試作に取り組んでいる。説明用スライド(全14枚)の内容は概略表4の通りである。

表4 第1回のスライドと説明の内容

第1部	1	導入
	2	聴覚障がいについて
	3	聴覚障がい学生の話
第2部	1	筆談体験
	2	テイクとは
	3	テイク体験
	4	まとめ・次回予告

4. 課題点

- 上記の撮影は受講生が不在の状態で行ったため、
- ①撮影に立ち会う学生は講習会の内容について熟知しているため、基礎的な箇所を省いてしまい初心者にとってわかりにくい説明になる場合がある
 - ②受講生の反応をうかがえない
- という課題があることが判明した。

5. おわりに

今回の取り組みを通じて、上記のような課題があることがわかった。解決のためには、受講生の反応がないことを想定したシナリオの書き方や新規受講生の立場に立ったビデオ作成となっていることの検討が必要となる。

そのため、今後は受講生役を配置して実際の講習環境に近づけて撮影を行うことを計画している。

参考文献

- (1) 栗田茂明: “IPtalk”, http://www.geocities.jp/shigeaki_kurita/ (2017年2月6日閲覧)
- (2) 上原亮太, 皆川雅章: “聴覚障がい学生の情報保障の継続的実施に向けたテイカー育成-学生による主体的取り組みの実践事例-”, PCカンファレンス, pp.20-23 (2016)